

# 1940, 50年代のアメリカ・ユダヤ系文学(3)

稲 田 武 彦

## The Aspects of Jewish Americans in Their Fiction of the 1940s and 1950s (3)

Takehiko Inada

### は じ め に

本稿では前稿〔「工学院大学・研究論叢」(以下略) No. 24〕を承けて、1940, 50年代のアメリカ・ユダヤ系文学の内的触発にかかわる Jewish identity の視点からはやや特異な、いわゆる Jewishness を顕在化させない作家たちと、逆の意味で異色なイディッシュ作家として渡米後ようやく認められはじめた Singer を取りあげ、最後にこの時期アメリカ現代文学の本流へ本格的に乗り出していったユダヤ系文学の概括をその literary background ないし milieu の考察を交えてこころみる。

### (9) 民族的 identity の拒否とその痕跡

社会・労働運動がアメリカのユダヤ系にとって Americanization の一つの大きな媒体となり(人種対人種でなく階級対階級の問題故)、30年代には当時の風潮と相俟って M. Gold の作品をはじめとするプロレタリア文学を生んだことは前稿(No. 19; pp. 115-118)で触れた通りだが、これは政治的、経済的“現実”の拒否であるとともに、Judaism の放棄でもあった。このいき方はその後アメリカ国内での大衆運動としてのマルクス主義の衰退や、New Deal, 参戦、戦後の(ユダヤ系も含めた)繁栄の推移、あるいは共産圏におけるスターリニズムの確立とその国内、国際政治への影響等によって変質しながらも伝えられていく。Judaism に関心が深かった Myer Levin (1905~81) などにもシカゴのスト中の労働者にたいする警察の発砲事件に取材し、一人の急進主義者の誕生を描いたプロレタリア的作品 *The Citizen* (1940) があるが、いわゆるプロ文学の伝統は1943年から57年まで比較的長く共産党に関係した(この間のことは自伝的な *The Naked God*—1957—に詳しい) Howard Fast (1914~) に代表されるだろう。

ユダヤ系労働者の子としてニューヨークに生まれた Fast (E. V. Cunningham および Walter Erickson の筆名も) は高校卒業後正規の大学教育は受けず、諸種の社会活動に加わるとともに、早くから著作に手を染め、小説のほか短篇、劇、詩、脚本、さらに SF、娯楽読み物にいたるまで多彩な分野で作品を発表してきたが、その本領はやはり数多くの歴史小説（創作的伝記も含め）——強制移住させられるシャイアン・インディアンの苦難を告発する *The Last Frontier* (1941) を皮切りに古代ローマの奴隷反乱を扱った自費出版の *Spartacus* (1951) など40、50年代だけでも十数編——にあり、人間の受難や社会正義への関心にに基づき、さらには作家としての社会参加の義務の信念から、ときにプロパガンダを交えたもの（例えば *Citizen Tom Paine*—1943）も書いている。因みに彼はその社会活動とのかかわりで1947年非米活動委員会への資料提供を拒み投獄されている。

このような立場から当然のことだが、Fast はその Jewishness との関係については否定的で、マルクス主義の公式通り、迫害を受けている人間はユダヤ人だけでなく他の少数民族（黒人など）もおなじであり、従って Jewish heritage に共感を持たぬと答えている（「Contemporary Jewish Record」誌の1944年の *Under Forty* というシンポジウムで——後述(1)参照）。事実共産党離党後も radical conviction を保持して執筆や平和運動にたずさわり、一方 Zen への関心も深めているといわれる。しかしながら、歴史ものの一環とはいえ、紀元前2世紀のマカベの反抗を題材にユダヤ民族の栄光をうたった *My Glorious Brothers* (1948年刊, Jewish Book Council of America Award 受賞) や *Moses, Prince of Egypt* (1958), さらに民族四千年の歴史を辿ったノンフィクションの *The Jews* (1968) もあり、ユダヤ遺産への関心なしとはしないし、総じて彼の作品に “Judeo-Christian concern” や emotional で religious な性格を指摘する評者もいる。Jewish radicals の政治的信奉すなわち messianism の代替という pattern は、彼の場合にもどこかであてはまるといえないだろうか。

一方30年代にトロツキズムに傾斜した若い知識人の心情もこの時期初めの Bellow や Rosenfeld の初期作品に反映しているが、やがて戦後のアメリカの安定と conformity の崩壊が始まり、肥大化した bureaucracy や企業体等にたいし、いわゆる反体制的気運のたかまる60年代に向けてさまざまな New Left が登場してくる。その有力な一人として、かねて無政府主義の影響のもとで30年代より創作活動だけでなく社会事象についてもユートピア的でしかも実用的提言をおこなってきた——例えば兄 Percival との共著で都市計画と建築デザインを扱った *Communitas* (1947)——のが

ユダヤ系の Paul Goodman (1911~72) である。

父が家族を棄てたためニューヨークのスラム育ちだが、City College 卒業後シカゴ大で Ph. D. を取得し、やがて50年代の若者の研究をもとに Beats や dropouts たちの subculture へ注意を喚起した *Growing Up in Absurd* (1960) で有名になるまで貧困のなかで仕事を続けながら彼はその “naive egomania” のため周囲から一目置かれていた。60年代に入ると H. Marcuse などとならんで反体制派の若者の代弁者として（この間「Liberation」誌の編集者にもなる）いきおい social study（ないし social criticism）の著作や講演が多くなるが、いずれにせよ Proudhon や Kropotkin のユートピア主義と無政府主義の伝統を継ぎ、一方 W. James や J. Dewey のプラグマティズムの回復を希求し、さらに教育改革者 S. Neill にならい、またゲシュタルト心理学から Freud, Reich へ傾倒するという多岐な関心、小説、詩、短篇、戯曲、文学評論の各ジャンルに手を出す多才ぶりで、年齢的にいって旧左翼と新左翼の調停者の立場にあった。その社会批評家としての主題は、組織と環境であり、強大な管理機構たる bureaucracy にたいして small communities 形成の自覚的行動に力点を置き、あるいは高度技術社会における人間疎外からの復権を説く。都市の機能障害や教育制度の欠陥への直截な対策提唱も抑圧からの性的解放の主張も、すべて人間本性に根ざす自律的要請の重視からきている。

およそユダヤ的なものにかかわらぬ人間の本性や今日の課題につく Goodman だが、その創作（小説三点、短篇集四点で、ほとんどが50年代までのもの）のなかには Jewish identity の問題をとりあげたものもみられる。例えば短篇 *The Facts of Life* (1941) (1945年同名の短篇集に収録) では、改革派のユダヤ系の家庭の娘が小学校で喧嘩でいい負かした男の子に “old-time Jew” とののしられ、親から自分が Jew だと知らされていない彼女はなんのことかわからず、帰宅してその意味を母に尋ねる。母は娘におまえは Jewess で、それはなにも恥ずべきことではないというが、事情をきいた父親は race, nationality, religion の三つの条件のどれにもあたらず自分たちがユダヤ人のふりをして何になると怒る。しかし母親は祖父母が Jew であればあくまで Jew だと主張する。ところが最後の場面で、Jewish race などないといっていた父親が Jew のあいだに天才が多いと自慢するや、妻は彼らはむしろ queer であり、自分を目立たせても Jew は有利にならぬと水を差し、揚句に Jew がいなければ反ユダヤ主義(anti-Semitism) もなくなるだろうと皮肉るのだ。全体的に場面転換もやや唐突で、A. Guttman のいうごとく明確な結論は受けとれないが<sup>1)</sup>、むしろ割礼をフロイトの見方と結びつけて娘に周囲の人間を序列づけさせるところなどに作

者の面目があらわれているようだ。そのほか、激しい雷雨の最中水を求めて祈るユダヤ人たちの姿に彼らが裕福であることを知らないでいる寓意をこめた *A Prayer for Dew* (1935) (*The Break-Up of Our Camp*—1949—to収録) のような作品もある。30年代から50年代まで成功志向型人間をパノラミックに描いたといわれる野心作 *The Empire City* (1959) は別として、二つの長編——*Parents' Day* (1951), *Making Do* (1963)——やその他短篇、詩には種族混合と同性愛の自由という彼独特の主張が具体化されているものが多く、やはり民族的アイデンティティにこだわらぬ面が強い。あえていえば、都市生活者としての関心、他のユダヤ系作家 (Mailer, Bellow, Rosenfeld 等) とともに宗教の代替物としてのライヒ主義に惹かれるところなどにユダヤ人気質の下地が感得されるというべきか。ただ小説の一部には Yiddish folk humor の工夫もなされているといわれる。

おなじくネオ・ライヒ派の一人で anarchistic な、すくなくとも30年代迄のマルクス主義の枠にはまらぬ radical intellectual として (自らは自由意志的社会主義者という)、Goodman 以上にアメリカ社会のさまざまな面の動向にそのショッキングな実際行為も含めて自らを投入し、旺盛な想像力と独創的方法をもって強烈に反応しているのが Norman Mailer (1923~) であり、彼はイギリス経由のロシア系ユダヤ人の血をひきながら、Jewishness についてはその創作活動への拘束を嫌い、自ら非ユダヤ的ユダヤ人の立場をとる。作家としての登場はその従軍体験による処女長編のいわゆる戦争小説 *The Naked and the Dead* (1948) で、いやでも作者の出自に絡むと思われる軍隊内の反ユダヤ主義については前稿 (No. 22; pp. 67-68) で述べた通りだが、それはあくまでも軍隊を一般社会の延長あるいは縮図とみてのことであり、事実 Mailer はタイム・マシーン (一種のフラッシュバック手法) による主要人物の小伝を挿入するなどして、戦争という限定された舞台に現代アメリカ社会の perspective をあたえようとしている。従って反ユダヤ主義の風潮もその一環として描かれ、テーマはひろくファシズム、リベラリズムなどを含む世界観の相克や権力意志の問題に及び、この点ユダヤ的なものはもとより戦争小説の領域をも超えて、ある意味では政治小説ともとれ、さらに將軍のホモ志向や鬼軍曹のサディズム、その他社会的諸エネルギーのあらわれにたいする関心にその後の作者の傾向がはやくもうかがえるといえてよい。

次作のイデオロギー小説で、悪評にもかかわらず、作者自らその後の創作の第一歩という *Barbary Shore* (1951) では、ブルックリンの下宿屋の密室的な小宇宙がファシズム化されたアメリカ (現実的には冷戦、朝鮮戦争、のちのマッカーシズム等によっ



て醸成される50年代前半の状況)を映し出す鏡となる。そこにモスクワの指令で自ら参加したスペイン革命を裏切り、良心の呵責にさいなまれる老トロツキストと彼を追う諜報機関の手先との緊張関係を軸とし、前者の妻で後者に籠絡される女家主、語り手の青年でトロツキストに後事を託される記憶喪失の戦傷者、ファシスト的恐怖政治と革命運動の昏迷によってついに精神的錯乱におちいるインテリの娘、これら五人の主要な住人がさまざまな sexual relation を持ちながら悪夢のような葛藤を展開する。政治的な見方からは、30年代以降の革命政治の敗北についての熱にうかされたようなアレゴリイであり、同時に当時のアメリカの現実にたいする絶望のなかの批判、警世の書ともなっている。続いて小説舞台はルイ15世の“鹿の園”の現代アメリカ版ともいべき Hollywood へ移る。作者の見聞をもとにしたこの *The Dear Park* (1955), は、映画王国の現実の生態——その巨大な機構に君臨する映画王、以下監督、プロデューサー、男女スター、コールガール、女衒、賭博師、成金たちのくりひろげる乱交、男色、スキャンダル等を痛烈に抉り(この点 Shulberg より大胆)、またそのうごめきやからみ合いのなかの人間心理を透徹した目で鋭く追い、アメリカ文明の腐敗と頹廃をとくに性的墮落を通して描く。その一方でのちの性的自由の問題の展開につながる設定もなされており、さらに、折から猛威をふるっていたマッカーシズムの不当弾圧に抗して首になった監督が結局屈伏させられることによって、アメリカの政治・倫理的歪みと古い世代のイデオロギーの崩壊も示している。

以上三つの長編で Mailer はどちらかというと特殊に設定された場を借り、現代アメリカの抱える問題を社会的現実の面から照射してみせたが、50年代の終りに問題意識を転換させ、それまでの中・短篇、詩、戯曲、エッセイ、論文、インタビューその他の集大成に“広告”と称する自己分析ないし自己批判を付した *Advertisements for Myself* (1959) なるものを発表した。これは精神的現実を扱い、現代における芸術家の役割を自らに即して語ったものであり、以後 Goodman 同様60年代に入って多くなる作者独自の多彩な社会的評論、あるいは自叙伝的ないしエッセイ風創作へのステップとなる。なかでもとりわけその発想の基点を明確に示したのが非自然的、非人間的抑圧にたいする反抗の人間“hipster”の分析を通し、当時の風潮に抗する反順応主義をうたった論文 *The White Negro* (初出は「Dissent」誌、1957年夏季号)である。強制収容所や原水爆の脅威によってもたらされた現代の精神的荒廃は深刻で、われわれはその恐怖にとりつかれるまま、創造的、反逆的本能を圧殺されてたえず理由なき死におびえていなければならない。このような集団的ノイローゼのアメリカ社会に発生せざるを得ない実存主義的存在形態が、これまでつねに死の危険にさらされ、

それにたいしジャズを特有な武器として生きてきた黒人を起源とする hipster つまり “白い黒人” なのだと Mailer は規定する。彼はこのほか本作品集で性や政治、経済、心理学など文化全般にわたり終末論的想像力を働かせて検討をおこない、ここでの認識に立ってその後、アメリカにおける性と暴力の雰囲気のなかで実存的主人公を形象化し、妻殺しを契機に自己解放による精神的再生をテーマとする *An American Dream* (1965)、次いで諷刺やパロディ等に満ち、猥褻についての作者独特の言語感覚を駆使した、いわば一種の言語解放の実験を試みながら、アラスカでの狩猟の話を通して、猥雑で狂気に憑かれたアメリカ社会の批判をおこなう *Why Are We In Vietnam?* (1967) の各創作や実存的政治等を取りあげた時評的論文集 *Cannibal and Christian* (1966)、テクノロジー・ランド化したアメリカ告発を交えつつ、ヴェトナム反戦の集会およびペンタゴンの包囲デモへ自ら参加し、逮捕された四日間の見聞に自伝的要素をからめた対応を一つのドキュメントたる個人的歴史として描いた部分と、集会・デモの組織の経緯と現場の推移を諸資料で追った歴史的記述の二部構成をとる *The Armies of the Night* (1968) などを出し、現代アメリカ社会の諸相に文字通り自ら進んでかわりながら倦むことのない活動を続け、依然としてユダヤ的素材ないし媒体を顕在化させてはいない。

しかし、そのような Mailer を同じユダヤ系の C. Angoff は「He has never written a “wholly Jewish” novel, yet it would be absurd to deny that something vaguely Jewish runs through his apparently totally non-Jewish writing, and there are critics who explain *An American Dream* in terms of Mailer’s Jewishness.」<sup>2)</sup> と述べ、またユダヤ系女子大生との性行為における肉と精神のアナトミーといわれる *The Time of Her Time* のように明らかに Jew の心性を頭において書いたと思われる作品もある。総じて作者の姿勢を A. Guttman のごとく「民族的主体性から解放され、自らの想像力のおよぶ限りのどんな役割でも演ずることを求められているユダヤ人のそれ」<sup>3)</sup> と考え、あるいは、「現代社会における自らの境界性と疎外の苦悩に関する作者自身の発言により、当のユダヤ民族そのものの中心人物になっている」<sup>4)</sup> ともされる。だがより端的には、American Jews を黒人とともに実存的存在としての少数派と捉える Mailer からすれば、square な American life に同化しては自己嫌悪を生むだけだから、その内面生活の精神的複雑さ、激しさ、精神病質的<sup>サイコパシツク</sup>ともいえる異才によって社会へ挑戦すべきだと唱えること（これは予言者の姿勢にも通ずる）で、まさにユダヤ系たる彼自らの立場を表明しているし、倫理的色調が強い作家という一部評者の指摘をまつまでもなく、自ら芸術観における道徳的意識を強調

する<sup>5)</sup> ところに Jewish morality の痕跡をみるといい過ぎだろうか。

Mailer とおなじく従軍経験（但し欧州戦線）をもち、やはり軍隊内の反ユダヤ主義を彼とかなり似通った設定でその戦争小説 *The Young Lions* (1948) (No. 22; pp. 67-68参照) に もり込んだ Irwin Shaw (1913~84) は、ユダヤ系という出自の背景があるにせよ、人種差別反対もその一つの表われであるヒューマニズムの立場に立つ。おなじ立場から次作のアメリカでの赤狩り問題を扱った *The Troubled Air* (1951) では、共産主義のかどで五人の主要な出演俳優の解雇を迫られたラジオのショウのディレクターが真実を探ろうと職を賭して苦闘する姿を描いた。これはすでに好評を得た反戦劇 *Bury the Dead* (1936) の作者として、その延長線にくるものでもあるだろうし、事実マッカーシズムは短篇にも直接題材とされ (*The Green Nude*, *Goldilocks at Graveside* 等), あるいは拭えない影を落としている。またげんに作者自身当時の国内の空気を嫌ってパリやスイスに転住した。その後長編は一家庭の崩壊過程を追った *Lucy Crown* (1956) など約十編を数えるが、*Rich Man, Poor Man* (1870) にしてもただユダヤ系の話というだけで、いずれもとりたててユダヤ的要素はみられないようだ。といって Mailer のように強烈な独自の予言者的 vision によるわけでもなく、Shaw の場合はさまざまな violence (人種偏見もその一つ) にたいする正義感ないし強固な人道・社会意識が根底にあって、それが作家としての moral へつながっているといえる。このことはむしろ本来ニュー Yorker 派の一人としての数多くの都会ものや戦争ものの短篇によく示されていて、長編に先立ち30年代から書き続けられたそれら諸短篇は、たんにそれぞれの時代（大不況、大戦中、戦後など）の雰囲気をつ捉えているだけでなく、人物を見据える作者の目は ironical であり、ペーソスを漂わせた抒情的文体と巧みな手法に支えられている。

上述のようにユダヤ的意識は正面切ってとりあげられることは少なく、底流となるときに表出する形をとるが、その一例に短篇 *Act of Faith* がある。従軍するまであまりユダヤ人意識にこだわらなかったアメリカのユダヤ系兵士 Seeger は、ヨーロッパ戦線で進軍中困苦をなめたユダヤ人たちから声をかけられ、自分が力強い同胞として誇りの対象とされるのに気づくが、さらに故郷の父からの手紙で、弟が戦傷により精神異常をきたし暴徒のユダヤ人襲撃の幻想におびえ、学者の父さえホロコーストが暴露された終戦直後でも根強い国内外の反ユダヤ主義の動きに神経を使っているのを知られショックを受ける。そういえば彼自身、戦争中から連合軍側も含めて見聞したユダヤ人への悪評を努めて忘れようとしてきたのを思い出し、戦死した方がよかったと願う。しかし死んだところで何の解決にもならぬと思い直した主人公は、戦闘中

援護射撃で命を助けてくれた人種偏見もたぬ同僚のため、ナチ親衛隊の将校から奪った記念品でかつ保身用の拳銃を売る決心をするのだ。このほかヨーロッパから非法に脱出してパレスチナへやってきたユダヤ難民の苦難を織り込んだ *Medal from Jerusalem* などにも作者のユダヤ人としての争えない血をみてとることができるが、あくまで人道的な立場で捉えられ、Jewish cause をふりかざしたものではない。

父は Judaism を離れたとはいえ、祖父がラビであった Jerome David Salinger (1919～) も、作品に戦争と子ども反ユダヤ主義的状况をとり入れることはあっても、同化の過程のなかの Jewishness を創作の重要な契機とはしていない。いわばユダヤ離れの作家で Mailer と似てなくはないが、これまでの全作品——戦後の若い世代の共感をよびいまや古典的存在ともなっている 処女長編 *The Catcher in the Rye* (1951) のほか、Glass 家の年代記（といってももっぱら兄弟姉妹の関係を扱う）の一環たる *Raise High the Roof Beam, Carpenters* (1955) など数点、三十篇にのぼる短篇とそのなかから大半を自選した短篇集 *Nine Stories* (1953) ——を雑誌への先行発表を含めると殆ど50年代に出したきり、その後隠棲に等しい沈黙を守っているところは、さまざまな試みを通してアメリカの現実に果敢に立ち向かっている Mailer とはきわめて対照的だ。

内容的にも猥雑な現実のなかにおける一種の purity 追求に力点があり、退学処分になった16歳の高校生 Holden Caulfield (*The Catcher in the Rye* の主人公) が感受性が過剰なだけ周囲の虚偽や汚れに傷つき、絶望しながらも、自己の存在証明を求めて彷徨する姿に青春の純粹さまたそれ故の苦悩を描き、*Seymour An Introduction* (1959) や *Franny and Zooey* (1961; 雑誌発表はそれぞれ55, 57) などの Glass 家の物語では、自殺した長兄で賢者の Seymour の思い出と、彼を心の支えとする弟や妹たちの精神生活へのその啓示を（ときには ambivalent な要素も交え）象徴的かつ前衛的技法を用いて浮かびあがらせようとする。そして作者の否定にもかかわらず、あとの作品（例えば *Hapworth 16, 1924—1965*）になるにつれ禅など東洋思想・宗教への傾斜や神秘的色合いが深まってきている。いかにもニュー Yorker 派らしい巧緻な技法を駆使した都会人好みのする諸短篇でも、西欧物質文明に起因する現代人のなんらかの精神的危機——心に受けた戦傷（Salinger にも欧州戦線への従軍経験がある）、喪失感、不安、疎外、不適応、虚構の世界と現実の乖離など——からの救済、自己回復を無垢な存在（おもに子供）や啓示的体験、超自然的秘蹟あるいは humor を媒介にしてはかるのがテーマとなっている。*Down at the Dinghy* (*Nine Stories* 所収) のようにときに陰微な反ユダヤ主義をにおわせることがあっても、それは幼児

の感ずる漠然たる不安の一つにとどまり、いわゆるユダヤ的要素を祖上にすることはない。総じて作者の意図は、醜く狭いエゴを超え、偏執からの解放によって精神的人間愛の教えに至るこの現代的ないし普遍的課題の過程を提示するところにある。

だがその Salinger も自らの根である 血や家から完全に 逃れることはできず、それはたとえ無意識であれ、生得的性向として作品のなかにも反映している。たんにアメリカでの minority にとどまらず、古来世界のなかで迫害された少数派のユダヤ民族であればなおさら、彼らにとって危険な外界にたいする拠りどころとしての家、生存を支える血の紐帯は大きく強い。西部へ旅立とうとして結局妹の愛に惹かれ家へ戻る Caulfield 少年、(半) ユダヤ系で家族的ナルシズムの強い Glass 家では、長兄を中心に強い絆が保たれ、Franny は兄たちからの啓示で人生への信頼を回復する糸口をあたえられる。このような親子、兄弟姉妹などの緊密な肉親関係は短篇にもしばしばみられるところだ。また、彼らの自己防衛の強さや自意識の過剰はユダヤ系としての疎外感の投影ともいえよう。

#### (10) アメリカに生きる identity の根——Singer の出発

ここで前項とは一転するが、初期の東欧系ユダヤ移民にとっては彼ら自身の文学でもあったイディッシュ文学の伝統を今に伝える Isaac Bashevis Singer (1904～) の仕事に触れておきたい。イディッシュ文学の遺産の現代アメリカ・ユダヤ系文学への影響については、物語の諸形式(民話、寓話など)、ユーモアや諷刺、原型的人物像(shlemiel=愚者, shlimazl=不幸者など)、言語リズムや語法、語彙等の点にみられることをすでに述べておいた(No. 16; p. 17)が、1935年ナチの手を逃れるべく兄を頼って渡米してきた(市民権は1943年に取得)ポーランド出身のユダヤ人作家 Singer の場合、かつての伝統を承けて自らアメリカで創作するという、いわば生身による impact をあたえているといつてよい。もっとも、さらに早い例としては、第1次大戦中2度目の亡命でアメリカに客死した古典的巨匠の一人 Sholom Aleichem (1859～1916) があり、近くは20年代から A. Cahan にみとめられ、一足先に移住した Singer 自身の兄 Israel Joshua (1893～1944) の活躍もみられたが、いずれも死後は忘れられていた。それはともかく、アメリカで Singer の創作活動の本格化するのがようやくこの50年代に入ってからであり、60年代前半も含めると、17世紀のポーランドでコサックに妻子を虐殺され、自らは略奪者の手で山村へ奴隷として売られた名門のラビの血をひく主人公が、啞を装う異教徒の百姓娘との愛を貫きながら、その苛酷で数奇な漂泊の生涯でたえず信仰の危機にさらされ、遂に苦難に耐えることによって

平静な境地にいたる *The Slave* (1962) まで長編が四点、短篇集は *Short Friday* (1964) までで三点を数える。そのいずれもが作者自身のほかに甥の Joseph Singer, S. Bellow, I. Rosenfeld などの翻訳共同体ともいべき人たちの手によって次々と英訳され、その特異な東欧の旧ユダヤ人世界の物語にもかかわらず、イディッシュ語の読者の枠を超えてひろい関心をよび、英訳本そのものが作者自らのいう第2の原本として現代アメリカ文学に影響を及ぼすというより、それ自体の豊かなバラエティの一部になりつつある。

ハシド派のラビで情情的な父と、理性と論理に依るミスナギッド派出身の母双方からそれぞれ神秘主義と近代懐疑主義を受け継いだ Singer は、一時神学校に在籍したりしたが、結局兄であるだけでなく文学上の師ともなった Joshua の感化でワルシャワの雑誌に短篇を発表し、すでに17世紀ポーランドの偽メシア運動を扱った処女長編 *Satan in Goray* (1934, 英訳55) を出していた。亡命後はイディッシュ語新聞「The Jewish Daily Forward」に東欧ユダヤ人一家の年代記 *The Family Moskat* (1945~48, 英訳50) などを寄稿するうち、1953年「Partisan Review」誌にのった Bellow 訳の短篇 *Gimpel the Fool* (同名の短篇集は57年) で注目をあつめる。村人からコケにされ、妻には間男されて何人もの他人の子を養育させられるパン屋の主人公 Gimpel はまさに shlemiel の典型だが、彼はいったん悪霊にそそのかされて村人への復讐を考えるものの、死んで悔い改めている妻の霊に諫められ国中を放浪して廻り、最後にいかに信じられぬことでもこの世に起こらぬことはないと悟る。この愚かで無垢なるが故に却って悟達の境地にいたる“wise fool”(もしくは“sacred fool”)の逆説は、ユダヤ民話の語り口とともに作者の世界にたいする認識に独特のものをうかがわせる。事実 Singer にあっては、このような逆説は相対するものの併存となり、聖と俗(伝統的律法と反律法的生活様式、あるいは神性と魔性)、合理と非合理(機械的なものと神秘的なもの)、自然と超自然、肉と霊……といった二領域の錯綜がとくにその短篇世界を特徴づけている。旱魃に苦しむ村のユダヤ人たちが、町からきた裕福な紳士(実は悪魔)にたぶらかされて生活の戒律を忘れ、黙示録的破滅に瀕したり(*The Gentleman from Cracow*)、屠殺される獣の血のなかで不倫の情慾をつのらせる農園主の妻は遂に人間狼に堕ちる(*Blood*)。またあるいは、禁じられた学問への道を歩むため男装した孤児の娘がたどる倒錯した愛の人生(*Yentl the Yeshiva Boy*)など、そこにグロテスク性や諷刺性、さらに意外性といった文学的效果が生まれ、ファンタスティックで神秘的な vision を浮かばせる。しかも一見非現実的世界ながら、登場人物(サタンなども含め)にシンボルないしメタファーとしての要素が強く、また神の

目の下で生きていた確かな小宇宙を感じさせることで、東欧の旧ユダヤ人社会という限定された場にもかかわらず、身近にかつ普遍性をもって読者に訴えてくる。これにはまた、ユダヤ的特殊性として指摘されるモダニズムの側面もあずかっているだろう。

長編ではすでに簡単に触れた三点のほか、19世紀末ポーランドで宗教も妻も捨てて罪深い生活に浸る有能な魔術師を通して神と迷蒙の人生を考究する *The Magician of Lublin* (1960) も含め、いずれも短篇にくらべ realistic な筆致でユダヤ人社会の歴史や年代記に取材し、そのなかでの主人公たちの生き方を追い伝統的社会の変容を描いたものが多い (のちの作品では *The Manor*—1967, *The Estate*—1970 など)。ともかく死滅に向かっているといわれていても、かつては Diaspora のシンボルであり、また民族の自覚と不可分なイディッシュで書き、主として Yiddish culture と深く結びついた shtetl を題材とする Singer は、その世界の消滅した今日、正統派で神秘的な東欧のユダヤ伝統の存在を己れのうちに確信する (但し、近代の啓蒙をくぐった上での) 唯一の生き残りの在アメリカユダヤ作家である。げんに60年代後半からは短・長編ともに現代アメリカを舞台とするものも多くなるが、依然として東欧での体験に色濃く染められている (例えば、前稿の No. 22 でとりあげた *Enemies, A Love Story*—1972—など)。こうして “a rich Yiddish tradition ... hedged by his own ironic metaphysic”<sup>6)</sup> をもたらすとともに、土俗的なユダヤ的想像力の原型として60年代のユダヤ系隆盛の一つの背景となり、*In My Father's Court* (1966) や *Mazel and Shlimazel* (1967) のようなそれぞれ回想記および児童向けの作品に至るまで、多様なジャンルにわたって旺盛に創作に取り組み、1978年アメリカのユダヤ(系)作家として Bellow についてノーベル文学賞を受賞する。

#### (11) ユダヤ系文学進出のエトス——二つの symposium

これまでもっぱら創作を通してこの期のアメリカの Jewish aspects を探ってきたが、次に Jewish authors の Jewishness にたいする意識、態度をより明瞭に (ときには過剰に) 解説あるいは代弁していると思われる二つのシンポジウム (いずれもアンケート方式による) を取りあげ、その対照的な時差に伴う結果の微妙な違いなど比較しながら、40, 50年代のユダヤ系文学進出の背後にあるエトスに触れてみる。

i) はじめのは大戦終結の前年のもので、当時まだナチスの “Final Solution” の実態は審らかでなく、アメリカ国内でも、30年代から尾を引いている反ユダヤ主義が A. Miller の *Focus* (1945) にもみられたように (前稿—No. 22; p. 66) 払拭されて

いなかった。しかし、戦後ユダヤ系文学進展のパイオニアともいえるべき S. Bellow の処女長編 *Dangling Man* (1944) 発表の年でもあり、その意味でユダヤ系文学隆盛への第一歩の時点としてモニュメンタルな暗合ということではできよう。このシンポジウムは「Commentary」誌の前身である「Contemporary Jewish Record」誌が当時の30代（いわゆる第2世代）を中心とする11人の寄稿をもとに、*Under Forty: American Literature and the Younger Generation of American Jews* (February, 1944) のタイトルでまとめており、Jew たることの影響、反ユダヤ主義の体験、author にとっての Jewishness などについて代表的詩人、小説家、批評家たちがそれぞれ見解を述べている。反ユダヤ主義については移民国家アメリカの事情もあって、被差別意識は抱かされてもあからさまな体験は共通してみられないが、Jewishness の問題になると、自らへの影響は認めても、創作にかかわる場合は回答者のあいだにニュアンスの違いがうかがえて興味をひく。

見方によっては積極的というより戦闘的肯定派ともいえるのが前稿(No. 22; p. 65)でも紹介した30年代からの急進的女流詩人 Muriel Rukeyser (1913~80) で、大戦中ヨーロッパのユダヤ人の苦難に同一化した彼女は改<sup>リフォーム</sup>革派の支援のなまぬるさを衝き、激化の一途をたどる反ユダヤ主義を反動化する議会とならべて糾弾する。アメリカ生まれの両親を持ち、ユダヤ伝統の雰囲気とは殆ど無縁に育ったにもかかわらず、旧約聖書への関心が強く、自分の人生と創作におけるユダヤ的遺産はファシズムにたいしても保証をあたえてくれるものだと言<sup>イ</sup>宣言する。事実彼女には *To Be a Jew in the Twentieth Century* のようなユダヤ的素材による作品があるが、その立場は結局自由、平等を願う一個の人間の権利とユダヤ人のそれとの一致をめざすことに帰着するようだ。

おなじく詩人でブルックリンに生まれ、ほぼこの40年代を通じ Harvard で教えながら短篇小説や詩劇も手がけるなど、その多彩な活動に入っていた Delmore Schwartz (1913~66) もユダヤ系中産階級の背景に深くかわり、例えば旧世界の影を引く中流移民家庭の不況下での生活を描き、父子の争い、母親の甘さ、子供たちの生き方を活写した *America! America!* (1940) 等に第2世代のトーンと気質がよく反映しているといわれる。その彼にとって東欧系移民の子であることはそれ自体重大かつ特殊な体験で、学校および街頭と家庭での言語の二つの領域を持った点、詩人としての言葉への鋭い感受性を培ってくれたと述懐する。そして、自分の体験の原因を理解する努力を作者の創作動機としたいので Jewishness は大切なものだといひ、さらに前回(No. 22; p. 73) も引用したが、「... the fact of being a Jew became available to



me as a central symbol of alienation, bias, point of view, and certain other characteristics which are the peculiar marks of modern life, and as I think now, the essential ones」<sup>7)</sup> との認識に立つ。ここには早くもその後のユダヤ系文学の展開のありようを示唆するところがあり、才気に富んだ創作者の炯眼というべきだろう。

Jewishness にたいし中間的立場にくるのは、シカゴに生まれて、高校、大学では Bellow のよき友人でライバルでもあり、当時新進の批評家・小説家としてその明晰さをうたわれながら惜しくも早逝する Isaac Rosenfeld (1918~56) である。彼によると、ユダヤ系はアメリカでは特異な少数派で意識過剰になり、中立を保たねばならない芸術家としては最悪の条件だが、一方完全に統インテグレート合されておらずといって全くの外国人というわけでないその立場から、marginal man としての観察の目を享受し、また都市生活者、中産階級という中間の位相により、思想・文化を含めた諸活動の集まる中心にいる利点がある。さらに Jewish community や子供時代の両親の影響を通してヨーロッパ的なものを持ち込んでもいる。しかし彼らの不安定さから「As a member of an international insecure group he has grown personally acquainted with some of the fundamental themes of insecurity that run through modern literature. He is a specialist in alienation ... .」<sup>8)</sup> であり、疎外は過去の伝統、Diaspora の歴史、知識人の現在の苦境、文明化された人間性の未来にかかわるとする。だが社会からの疎外は逆によりよい社会への変革につながり、ユダヤ系作家にたいする世界救済のための倫理的発見への期待もそこに由来する。疎外はこのようにぜひ取り組まねばならぬ問題であるといいながら、Rosenfeld は最後に、しかしそれが human range の全域にわたらないので、ことさら重視したくはないと結論する。前稿 (No. 24; p.10) のように没後の短篇集 *Alph and Omega* (1966) をみる限りでも、総じて Jewishness を強く意識したものではなく、ただカフカの ambiguity とややグロテスクなユーモアのほか、主人公がユダヤ系のものに漂う一種のペーソスに彼の主張がうかがわれるかもしれない。

両親が帝政ロシアからの移民でブルックリンの Brownsville に生まれ、Rosenfeld 同様早くから批評活動を始め、1942年には独自の洞察にもとづく現代アメリカ文学史 *On Native Ground* を出して批評家の地位を確立していた Alfred Kazin (1915~) は、きわめて屈折的でソフィストケイトされた形だが、Jewish background に留意しつつも自らの信ずるところに従い、ユダヤ文化に関係なく自分の文化をつくりあげねばならないと考える。彼がユダヤの伝統と一部のユダヤ人において尊敬するのは、

純粹な標準的ヘブライ文化と人生の精神的基盤にたいする不滅の信念などであり、自分は作家としてまた個人としてそれらの考えの影響は受けてきたが、アメリカのユダヤ文化やユダヤ系作家にはいまだ多くのものを見出せないでいるという。アメリカのユダヤ系は過去の遺産と現在の望みとのあいだのどっちつかずの状態にいるのだ。また、彼らがこの国の文化・生活においてもはや見物人でなく完全な参加者だという説にも疑問があり、それなら移民ないし移民の子である体験と Jewish であることのそれとを混同するのをそろそろやめる時ではないか。いままでみせかけの信念やセンチメンタルな chauvinism にいかにか自分たちの世代の American Jew が陥りやすかったことか。自分が意味ある Jewish life やユダヤ文化の一部でなくとも、ユダヤ系である事実を受け入れそうなるよう努めたが、結局「... I learned what was more important for me in my apprenticeship as a writer — to follow what I really believed in, not that which would merely move me through associations or naive community feelings.」<sup>9)</sup> だとして、Blake, Melville, Emerson, Russian novelists など影響された著作はユダヤ文化には直接関係がないとする。元来彼には文学の世界をめざして周囲から脱出しようという強い志向があったことを Kazin 自ら初期の自伝で認めている。

Columbia の英文科教授でユダヤ系としてははじめて終身<sup>デニユア</sup>在職権を認められ、アメリカ文化における“liberal imagination”の復活を唱え、またヴィクトリア朝文学に傾倒した40、50年代を通しての主要な批評家の一人 Lionel Trilling (1905～75) も、自分の世代にとって Jewish origin を免れることはできないとする。ただ Jew という語に特別な感情を持ち、それによる気質や知性への影響は明らかであり、Jewish religion にも一定の役割は認めるが、専門的知的生活にはユダヤ起源につながるものはみつからず、従って自らをユダヤ系著作家とは考えないし、Jewish purpose に奉仕する気もないと断言する。ユダヤ文化誌にたずさわった経験からいっても、ユダヤにこだわるのはおのれを狭く不毛にするだけで、これを作家との関係でいえば、「I know of writers who have used their Jewish experience as the subject of excellent work; I know of no writer in English who has added a micromillimetre to his stature by “realizing his Jewishness,” although I know of some who have curtailed their promise by trying to heighten their Jewish consciousness.」<sup>10)</sup> と Kazin よりかなり否定的だが、彼の共産主義の誘惑とそれへの幻滅を描いた小説 *The Middle of the Journey* (1947) は Jewish sources に触れていないため却って活力に欠けるという指摘もなされている。

徹底的な否定派は本稿の(9)で述べたように H. Fast の場合で、マルクス主義の公式にのっとり、迫害を受けているのはユダヤ人のみではないから Jewish heritage に共感を持たぬというものの、ユダヤ民族の栄光を題材にした作品もあることについてはそれなりの解釈が成り立とう（前述部分参照）。

ii) 以上どちらかというとは Jewishness へのかかわりに否定的なトーンの強い、あるいはそれを普遍的立場に捨象しようとする 40 年代の結論を踏まえて「Commentary」誌が、ethnic power をうけてユダヤ系文学がアメリカ文学の一つの代表的地位にあがろうとする直前の 1961 年に、より広い分野のアメリカ生まれの若い第 3, 4 世代を対象にあらためて Jewish identity を探ったのが *Jewishness and the Younger Intellectuals* なる回答式のシンポジウムである。この間十数年、戦後のナチスの教訓による assimilation の再検討や、Martin Buber, Yiddish storytellers, Hasidism などの人気の高まり、イスラエルの独立とアラブとの抗争、ユダヤ人差別や反ユダヤ主義の衰退を背景に同誌の編集長 Norman Podhoretz (1930～) はそのシンポジウムのはしがきで、“alienation”を鍵とする前回の世代の Jewishness にたいする態度の急激な変化を論じている。それは一言でいえば肯定的な方向への転換であって、しかも移民の郊外生活での体験の豊かさを祝福するものであり、Kazin が疑問視したアメリカ文化・生活への全面的参加である。その主因について「...the main factor operating here, I believe, was the widespread retreat among intellectuals from the whole complex of attitudes symbolized by the term alienation. The new relation to Jewishness, in other words, was an aspect of the new and more positive relation to America which was bred in large part by the menace of Soviet totalitarianism on the one side and the change (or apparent change) that had taken place in the character of the American middle class.」<sup>11)</sup>とし、「Partisan Review」誌のシンポジウム *America and the Intellectuals* (1952) もこれを裏書きしており、知識人が積極的にアメリカ人自身を評価したのがユダヤ系にも及んだのだと考える。

またさらに、本能的ともいうべき同胞意識、連帯感の触発からユダヤ人としての存在の意味の覚醒がはかられる。例えば Kazin の場合憂慮していたとはいえホロコーストの惨状に強いショックを受けるが、それは戦中、戦後の主としてユダヤ系知識人たちの動静と自己の女性遍歴を赤裸々に記した自伝第 3 作 *New York Jew* (1978) にも語られており、終戦間際たまたまロンドンにいた著者は、解放されたばかりのベルゲン・ベルゼン強制収容所のユダヤ人たちがはじめての shema (毎日の朝夕の祈り)

を唱えるのを街頭に流れるラジオできき、思わず雨中涙しながらそれに和したという。<sup>12)</sup> 彼はまた、アメリカにおけるユダヤ系文学の定着を、とくにアメリカ文化に多大の影響をあたえた40年代以降のユダヤ系知識人たちの活躍の分析を通しておこなっている *The Jew as Modern American Writer* [Commentary Reader (1966) の preface] で、ヨーロッパのユダヤ人たちの“殉教”以後 Jewish survival と Jewish self-determination が世界のすべてのものに関連を持つとし、「...the Jewish writer after 1945 had particular reason to feel that this most terrible of all events in Jewish history bound him more closely to every fundamental question of human nature and historic failure involved in Europe's self-destruction」<sup>13)</sup> との認識によってその社会主義への変らぬ関心とともに Jewish author としての意識を強めているようだ。

ところで急進的30年代とは無縁で、新保守主義、宗教復興、アメリカ再発見の時代の子であるより若い世代の声はどうか？ それは意外にも Jewishness にたいする強い拒否でも賛成でもなく、Jewish heritage を評価はしても実際のかかわりは持たず、Jewish community にもアメリカ中産階級とくらべて特性を見出していない点では第2世代と大差はない。イスラエルへの共感に圧倒的だが、やはり chauvinism には反対であり、より広い世界への帰属を表明する。なによりも強いのは、その idealism で、彼らはこれを Jewishness と結びつけ、理想のために闘う者をたんに儀礼を守る者や自分を Jewish community と一体と思う者より Jewish だと考えている（これも前回の回答者と基底は同じと Podhoretz はみる）。そして前途に思い描くのは、Jewish community よりもユダヤ人解放後の西欧文化社会への参画者たち (Marx, Freud, Einstein etc) の歩んだ道であって、良いユダヤ伝統は近い将来ユダヤ人だけのものではなく、ユダヤ人そのものの消滅さえ予期している向きもいる。

これにはさすがに Podhoretz も賛成しかねているが、もともと彼自身東欧系のユダヤ移民の子としてブルックリンに生まれ、その文学への志向のなかで普遍性を求めてユダヤ社会からの脱出をはかり、奨学金を得て Columbia の Trilling のもとにつく一方で Jewish Theological Seminary にも通い、さらに英国の Cambridge へ留学するうち、アメリカ人としてまたユダヤ系としての自意識から帰国するというように、自己超越と自己受容の複雑な屈折、転向の体験を経ているからだろう。ついでに彼の立場をいえば、西洋文明の継承者の意識から出発して文化の融合が強い関心の的となり、Judaism への自覚とアメリカ人としての自覚の一致を唱え、一文化としての Judaism の特質を推奨するいわゆる文化的多元論に至っている。彼はこの当時「Com-

mentary」誌に関係するかたわらずで若手の文学批評家として活躍を始め、1950年代とその後のアメリカ文学をユダヤ文化も含めた文化全般にわたる広い視野から扱った評論集 *Doings and Undoings: Fifties and After in American Writing* (1964) などを出している。

さて今回の回答者のうち前稿 (No. 24) でとりあげた作家二人の場合をみると、まず Herbert Gold (1924～) は、ユダヤ人のつくり出した特別な価値は宗教的なものより他のものを通して生き残るだろうと述べ、Jewish community も宗教的要素が主要でなくなり、知識人のそれにたいする絆も弱まるとしながらも、のちに *Fathers* (1966) で四代にわたる各世代間の確執を描くなかで、Judaism の継承を感じとっている作者らしく、ユダヤの宗教的教義、儀礼の内容は自分にとって大事なものだとし、最後に「The American Jewish community is most important to me as a writer because it is a mirror in which the rest of America can be seen. Like all mirrors, it invites distortion.」<sup>14)</sup> とユダヤ系作家としての立場を打ち出している。

また、アメリカ社会におけるいわゆるユダヤ的価値に逆説的なメスを入れる Philip Roth (1933～) は、Jewish style of life がアメリカのそれとさして違わず、伝統の価値も一民族の特性といえなくなり、反ユダヤ主義の衰退であえて自らをユダヤ人としてまとめる必要もない現在われわれユダヤ人を結びつけるものはなにか? (この点彼は創作のうでで反ユダヤ的に扱うことから却って Jewish identity を意識化させているともいえる)。律法や神への関心が薄れてはイエスをキリスト(救世主)にあらずとする考え方だけで異教徒と区別されるのでは、結びつきの理由としてはいかにも弱いと終始互いの Jewish identity に疑問を投げかけ、アブラハムとその子孫にたいするつながりを認識するには結局彼らの神を理解するしかないのだろうとまでいっている。それでも、従来とかく Jewish community とのあいだで摩擦をおこしてきた Roth だか、近年伝統志向のきざしがあるとの見方もされている。

このようにまだ戦争中の40年代前半と、平和のなかで意識の変革の始まりかけた60年代初期の意見の対比を通して見たとき、総じて戦後十数年が経過するうち、アメリカのユダヤ系をとりまく状況が好転し(社会・経済的地位の向上、高等教育の普及と専門職の増加、郊外生活の享受、対ユダヤ人差別の終息など)、ethnic identity の再発見の波にも乗って、ユダヤ的なものへの関心の高まりがみられるなかで、後者には44年の場合一部にあった気負いのような感じはなく、アメリカ社会への一段と豊かな定着で余裕さえうかがえる。しかし一方、これは同化のますますの促進ということになり(その意味では基本的には前の世代も今度のそれも同一線上にある)、Roth では

ないが却って Jewishness が問い込まれ、Jewish community の消滅が懸念されているのは大いなる皮肉であろう。もっともこの内なる負の触発<sup>ファイグス</sup>のもとに緊張は、トーンはさまざまでも 60 年代以降も作家にとってその作品世界を支える梁となっていく。それはともかく、この二つのシンポジウムのおこなわれるあいだに Fiedler のいうユダヤ文化・社会のアメリカ化（ないしはその逆が）おこり、Bellow, Malamud, Roth などの代表的作家が Kazin の不満にこたえられるだけの実質的成果をあげることによってそれを如実に示したといえるのだ。

## (12) ユダヤ系文学進出の literary milieu — Jewish Intellectuals と Magazines

文学界に限らず他の分野も含め、40、50年代のユダヤ系進出を支えた戦中、戦後の経済・社会的背景（地位、教育、居住条件など）については前稿〔No. 22, (A)―(3)〕で触れておいたが、ここではより直接的にユダヤ系文学の進展を促した要因として、論壇も含めたユダヤ系知識人の活躍とその舞台を提供した文化・文学雑誌の推移をみる。

i) Jewish Intellectuals; 「戦後のさまざまな文化活動でなによりも目立つのは人口比からいっても驚異的なユダヤ系知識人のそれであって……アメリカが都市社会に移行したのと歩調を合わせて彼らが出現したことがアメリカのユダヤ系文学の豊かさをもたらした “dynamic reason” である」<sup>15)</sup> といわれるが、文学界を中心としたその40、50年代における具体的光景は前出の A. Kazin の自伝 (*New York Jew*) や N. Podhoretz による文壇での成功をめぐる異色な自伝 *Making It* (1967) に生々しく描かれているところだ。60年代の始まる頃までに第一線に立った者に限れば、年齢的には四半世紀ほどの開きはあるものの、おおむねアメリカの都会生まれで、旧世界を抜け切れない1世に育てられ、青少年期を両大戦間で過ごし、多かれ少なかれ大不況の社会・経済的苦境やファシズムの抬頭等不安な国際政治の影響を蒙った第2世代（一部第3世代も）だが、彼らは従来ユダヤ系にとって殆ど City College に限られていた高等教育機関を他の有名私大にも拡大し、Kazin や Podhoretz の例にみるように、周囲の移民の狭い共同社会から文学などを媒介に自由世界へとび出し、職業生活に移民感情を持ち込まずアメリカ化をめざした。

かくて医者、弁護士などとならんで学者、ジャーナリスト、批評家として知的世界に占めるポストもふえてくる。彼らは社会や政治への関心が高いところからより客観的、論理的、普遍的記述による論壇での活動の方が比較的早く、その分野も social commentary, review, article, essay, monograph と多岐にわたる。やがて Bellow

や Malamud などユダヤ系作家の作品が文学界で耳目を集めるのに伴い単発的ながらユダヤ系文学・文化について論ずるものが50年代後半からあらわれ<sup>16)</sup>、60年代に向けてユダヤ系の積極的<sup>アイデンティファイケーション</sup>自己確認、自己主張の気運を醸成する。雑誌の執筆陣もおのずと一定し、ここにユダヤ系文学・文化圏 (establishment あるいは family と呼ばれる) の自然的形成がみられるに至った。例えばすぐれた解説を付した I. Howe と E. Greenberg 共編の *A Treasury of Yiddish Stories* (1955) (前稿一 No. 24; p. 7 参照) も知識人仲間の後援で出版されたといわれ、また Singer の作品の場合、Bellow をはじめとするユダヤ系の翻訳共同体ができていることは本稿(10)でも触れた通りだが、その他書評など仕事の幹旋や彼ら同士のパーティーでの交遊程度のことはあっても、一部で懸念されたほど結束の固いものとはならず、Podhoretz によれば acculturation の過程で60年代中期までには解体してしまったとされている。

元来先駆的なユダヤ系知識人としては20年代から30年代にかけて左翼系 (M. Gold 等) やシオニスト系 (M. Samuel 等) がみられたが、グループとして特定のエトスを示すには至らず、30年代半ばにはじめて “New York Intellectuals” といわれる、大部分がユダヤ系の批評家、作家、エッセイスト、ジャーナリストの一群がニューヨークを中心にあらわれ<sup>17)</sup>、最初そのなかには P. Rahv<sup>18)</sup> (ウクライナから移民、文芸批評家・ジャーナリスト; 1908~73), W. Phillips (ニューヨーク生まれ、文芸批評家・ジャーナリスト), L. Trilling, P. Goodman, M. Schapiro (リトアニアから移民、美術批評家・コロンビア大教授; 1904~), H. Rosenberg (ブルックリン生まれ、美術批評家・シカゴ大社会思想委員会メンバー; 1906~), C. Greenberg (ブロンクス生まれ、J. Pollock など を発掘した美術批評家・ジャーナリスト; 1909~), S. Hook<sup>19)</sup> (ニューヨーク生まれ、エッセイスト・ニューヨーク大哲学教授; 1902~) 等が名を連ね、やがて第2次大戦開始前後から D. Schwartz, I. Rosenfeld, S. Bellow, A. Kazin, H. Arendt<sup>20)</sup> (ハノーヴァー生まれの女流政治哲学者、シカゴ大社会思想委員会メンバー; 1906~75), さらに戦後にかけて L. Fiedler<sup>21)</sup> (ニューワーク生まれ、文学批評家・作家・モンタナ大学教授等; 1917~), I. Howe, R. Warshaw (エッセイスト・映画評論家・ジャーナリスト; 1918~55) I. Kristol (社会批評家・ジャーナリスト), D. Bell<sup>22)</sup> (ニューヨーク生まれ、社会批評家; 1919~), N. Glazer<sup>23)</sup> (ニューヨーク生まれ、社会学者・カリフォルニア大教授等; 1923~) 等が加わって中堅となり、50年代後半に N. Podhoretz, P. Roth のような若手の登場を迎えるのである。Kazin によれば “What saved Jewish writing in America from its innate provincialism, what enabled it to survive the moral wreckage of the 30's, was

the coming of the *intellectuals*——」<sup>24)</sup> となり、その文学的共通点として彼らにおける「現代文学」の支配的風潮からしてブルジョア的価値基準の破壊（俗物主義への反対）、インターナショナルな気質（ヨーロッパの知識人や文化への近親感）、知性の優先と想像の自由の擁護をあげ、「これら知識人が“modern movement”のもとにかつてみられなかった知的精神を示した」<sup>25)</sup> としている。彼らはこのような前衛的“literary modernism”の継承によって Joyce, Proust, Kafka 等の積極的紹介にも取り組み、移民生活の尾を引く Jewish writing の狭さのみでなく、従来のアメリカ文学のなかのアメリカらしさまで打破し、アメリカ文化の国際化を進めるのに貢献した。

さらに彼らのもう一つの特性はその政治的急進主義<sup>ラディカリズム</sup>にあった。これには“Red Thirties”の時代的影響だけでなく、1世の移民たちによってもたらされた旧世界での社会主義思想（世俗的 messianism）の素地も働いていただろう（実際 Howe によれば社会主義と19世紀のヒューマンイズムの文化の合一が近代の世俗的ユダヤ人の伝統になっていたという）。しかし、いずれにせよ 30年代後半にはそれまで関係を持った者も多くが共産党を離れ、一部トロツキスト的心情を抱きながら反スターリニズムの左翼の立場に立っていた。従って芸術の自律性を信条とするモダニズムと党の官僚主義を脱した急進主義との結合が当時のこの知識人たちのトレードマークだった。それぞれが青年時代に文学へ野心をもやし、とくに批評の才にすぐれ、知性と独学的知識に富み、観念への偏愛と論争好きな性向を持ち、ステレオタイプの嫌いな個性的人間であり、自らの現実感覚のみに執することからくる危険の可能性（例えば保守的なエリート意識）がありながら、たえず現象を歴史的・社会的コンテクストにおいてみる客観性も備えていた。ここから Howe の指摘する彼らの特徴「a flair for polemic, a taste for the grand generalization, an impatience with what they regarded (often parochially) as parochial scholarship, an internationalist outlook, and a tacit belief in the unity ... of the intellectual vocation」<sup>26)</sup> もくるし、政治と文学についての概念を組み合わせた幅の広い、ときとして誇示的でかつ高度に自意識的な様式の文章——“the style of brilliance”<sup>27)</sup> (Podhoretz にいわせると批判的に過ぎ、博識で、引<sup>アリユージョン</sup> 喩に富む文体)<sup>28)</sup> も生まれる。だが Howe はこの“brilliance”も一面では“a sign of intellect unmoored”で、「the less assurance, the more pyrotechnics, as if it were still necessary to *make an impression* on the external world」<sup>29)</sup> なのだとその一種の焦燥感を衝いているが、Fiedler になるとグループに共通するのは「典型的に世俗化した不安な Jew の姿で、彼らは Jewish past に憑かれ、



その遺産たる messianism と格闘しており、Jewishness への特異な関係はその疎外感を強め、彼らをして単純な liberal-middlebrow に陥らせないのだ」<sup>80</sup>とまでいっている。これは少々穿ちすぎであるにせよ、総じてこの知的欲求に満ちたユダヤ系知識人の活動には、二千年にわたるあのあくなきタルムード研究者の伝統を思いおこさせるものがあり、いってみれば現代の知的世界は彼らにとってこれまでの伝統世界にかわるものなのだ。

潜在的には別として、移民としての Jewish life の殻を抜け出し、社会主義思想と現代文化の普遍性を尊重する彼らはそれなりに acculturation をはたしたとはいえ、依然アメリカにも属している気がせず、自らを“世界の市民”と考えていたが、やがてその political idea と cultural idea の結びつきそのものがしっくりいかないことに気づいてくる。つまり急進主義（これ自体さまざまだが）はモダニズムの一面に支障となり、逆にモダニズムは日常世界を避け反動的動きと手を結ぶ傾向があるということだ。加えて第2次大戦の性格とその支持をめぐる意見の対立ないし分裂が起こり、戦後はホロコーストの衝撃や冷戦（全体主義国家としてのソ連の脅威を背景とする）、アメリカの繁栄などの要因も働き、Podhoretz もいっているように〔本稿(1)―ii) 参照〕知識人の現実への積極的参加ないしその受容がおこなわれる。すなわち反スターリニズムから反共主義へと急進主義の要素の衰退とアメリカの民主主義、資本主義の容認が起こり、マッカーシズムの時代にはむしろ一部のリベラルにたいする攻撃もみられた（因みに D. Bell によれば1950年代でイデオロギーの時代は終わったとされる）。一方モダニズムの擁護と大衆文化の質の低下への攻撃にたいする疑問も出て、avant-gard に style of fashion がとってかわるとともにアメリカの現実もこれら知識人たちに門戸をひらき、学界や文学ジャーナリズムが彼らを好意的に迎え入れ、従来限られていた作品発表や研究の場の拡大で経済的安定にも資するようになる。こうして疎外的立場にいた彼ら自身がいつしかアメリカ現代社会のなかの疎外状況のひろがりやでその中心に位置するに至り（アメリカ文化の周辺から内部への移動で孤立化の解消となる）、複雑化した戦後世界の解明に用意されることになったのだ。以上 New York Intellectuals 変容の過程がまさにこの40, 50年代を通じての現象であったわけで、ホロコースト以後の Jewishness の不可避性（たとえ宗教的、民族的内容がなくとも）の認識ともども、さらに60年代に向けて彼らの自己超越から自己受容への軌跡を程度の差はあれそれぞれの仕事（とくに文学面で）に残していくことになる。

ii) Magazines; これらユダヤ系知識人の多くが拠り、彼らと表裏一体ともいえる機能をはたしたのが P. Rahv をはじめ これまた大半がユダヤ系の手によって創刊さ

れ (1934), 編集されていた「Partisan Review」誌 (以下「PR」) であり, そのユダヤ系関係者の多いことから E. Wilson (1895~1972) に “Partisanship Review” と綽名されたほどである。創刊時からの編集者の一人 W. Phillips の回想など<sup>31)</sup>によると, もともと共産党の政治優先の文芸路線を掲げていた「New Masses」誌への対抗から, John Reed Club (若手の左翼作家, 芸術家のための党の文芸活動の会) のニューヨーク支部が作らせた小雑誌の一つとして発足したのがたちまちその中核となり, その後クラブの解散のあおりで他誌 (「Anvil」) と合併しながらかねておこなっていた党のセクト的文芸政策 (ソ連擁護と反ファシズム重視による人民戦線路線のための作家の統合など) にたいする批判でついに発刊2年目の1936年10月発行停止となる。翌1937年 Rahv と Phillips を中心に (他に M. McCarthy, D. Macdonald, F. W. Dupee など) 独自に再刊され, 依然として社会的関心は保持したがモスクワ裁判等を契機に党とも絶縁し, 反スターリニズム (当初はむしろトロツキズム寄り) の立場をとり, 文学的には前衛的モダニズムに拠った (これはある意味でいわゆる政治と芸術の分離をめざすことにもなるが, 初期の寄稿者はトロツキーから T. S. Eliot にまで及んだという)。その後スターリニスト, トロツキスト, 非スターリニズムの急進派などの攻撃を受けるなかで次第にマルクス主義そのものの批判へと進み, 知識人の役割やその意識を通しての文学・文化的要素 (インテリの疎外感, 反教条主義, モダニズムの radical sensitivity 等) の重視へ向かった。大戦初期には反戦・平和主義, 反ナショナリズムなどから参戦反対ないし態度保留の姿勢をとり, やがて戦争の性格やイデオロギーをめぐる編集内部の対立を経て “ファシズムにたいする民主主義の戦争” への賛成 (Rahv 側) へかわり, ヨーロッパ知識人への関心を高め文化の擁護につとめた。戦後は当時の知識人の大方の動向を反映するように, 革命の理想も放棄し, 強大となったスターリニズムのソ連へあらためて警戒の念を強め, 民主主義アメリカの是認へと現実を受け入れるのに傾き疎外感の払拭を招来する。さらに一部には保守的要素をも含みながら50年代のマッカーシー旋風のなかでは, それ自体に批判的でも弾劾された “全体主義的リベラル” の擁護には動かなかった。その後も新右翼と狂信左翼の双方を排しつつ, ラディカルな政治とラディカルな芸術の結びつきはゆるんでも, 大衆芸術の支配を蒙らぬ知識人の良心としてアメリカの文化, 政治への批判者という基本的立場を崩さず, 文学上の問題へさらに力点を置いていく。

以上のように変遷はあったが, その左翼的論争調の姿勢とモダニズムによる文学的要素が大不況期に社会主義的志向を抱いた多くのユダヤ系の文学青年や若い知識人たちをひきつけ, D. Schwartz や I. Rosenfeld のようにそこを専ら自分たちの活動の

場とする者も出てき、前者などはのちに編集陣に加わった。こうしてユダヤ系や海外の知識人をも含む寄稿者にも常連というべき顔ぶれができて、文学的新機軸と価値観との新しいバランスをとるというその独特なスタイルとともに「PR」は時代の知的世界をリードする存在となる。いいかえれば、彼らの作品、エッセイ、論文等を通してその創造的イメージ、主張、理念が全国的さらに国際的市場性を獲得していく上での有力な媒体の役割を担ったのだ。有力なユダヤ系作家として Bellow の文壇への出発も異色なイディッシュ作家 Singer が翻訳による *Gimpel the Fool* の紹介で注目されるきっかけをつくったのも本誌であり、逆に「PR」の idea はこれらの作品によって具現されたともいえよう。ふたたび Fiedler によれば、たとえ購読者数は少なくとも(1957年頃で7,000~8,000部といわれる)、インターナショナルな文化的、知的一大拠点として国内外に絶大な影響力を持ち、“urban alienation”のイメージを期待されていて「If the concept of the highbrow has become for most Americans associated with the notion of the urban, Jewish, former Communist, this is in part the work of Partisan Review」<sup>82)</sup>とされる所以だろう。

「PR」の highbrow にたいしむしろ middlebrow を重視するものの、執筆陣が「PR」のそれとままた重なる「Commentary」誌（「Contemporary Jewish Record」誌の後身）は The American Jewish Committee (1906年設立) によって1945年11月に創刊され、まさにユダヤ系出版物として ethnic culture に重点を置き（ただし非シオニズム）、ユダヤ系作家、知識人たちの“new maturity and sophistication”<sup>83)</sup>を進んで受け入れた。こうして本誌は大战後の本格的ユダヤ系文学の発足に歩を合わせ、ユダヤ系作家の伸長に寄与し、“a symbol of and a home for this intellectual spirit”<sup>84)</sup>となったことはひろく認められているが、同時にきわめて批判的かつ客観的なやり方で多くの一般的問題を取りあげ、非ユダヤ系にも開放されていた点は Kazin なども内心驚くほどだった。これには前にも触れたような戦後の知的風土があずかっており、前衛的知識人の志向とユダヤ的なものへの関心の両立等がみられたことにもよろう。はじめユダヤ人委員会が編集長 (Eliot Cohen—1959年歿) に指示したところでは「ユダヤ人の問題と現代の論争点についての意見雑誌をつくること」だったが、それにたいし Cohen は「ユダヤ系知識人とアメリカ文化の結合および彼らとユダヤ人社会との融和」を構想していたといわれる。さらに、Judaism にたいする自覚とアメリカ人としての自覚の一致を唱え、1956年からこの雑誌に関係して1960年には自ら編集長に就任した Podhoretz によると、「発刊当初より今日まで時代の重要な知的思潮における関心を、とくにユダヤ的論点に関する知的関心に融合させること

を追求してきた」<sup>85)</sup>とし、彼はこれをアメリカのユダヤ系知識人と彼らのユダヤ人的経験の健全な関連を示す現象の一つだと考えている。本誌はこれよりさきマッカーシズム時代にはその脅威を過小評価し、強硬な反共路線をとってむしろリベラルの“迷蒙”を攻撃したが、60年代に入ると P. Goodman や J. Baldwin 等の起用による急進化をはかり、当時のアメリカの知的気運と合致して部数もそれまでの2万部弱から6年後には6万部へ飛躍した。

「PR」を側面援助したといわれるのが上記の「Commentary」のほか、「Encounter」や「New Leader」（1923年刊、週2回刊行の社会主義の文芸・評論誌）などであり、政治的立場は異なるがモダニズムとのかかわりから知的雰囲気による刺激をあたえた点で、折から興隆を迎える new criticism の牙城「Kenyon Review」や「Sewanee Review」がある。また、M. Cowley（1898～）が文学欄を担当していた進歩的思想週刊誌「New Republic」（1914年創刊）では Kazin や Schwartz, Rosenfeld が書評、編集にたずさわり、やはり社会・政治的関心に重点を置いた「Nation」（1865年創刊、進歩的週刊評論誌）もユダヤ系の拠点の一つになる。「Dissent」（1954年創刊）は党活動から反スターリンへかわった I. Howe がその社会主義的信条と当時の順応主義への危惧から自らはじめたもので、のち N. Mailer も加わって彼もまたユダヤ系知識人の一員とみられるようになった。一方「New Yorker」は商業主義と俗物根性の典型としてはじめ「PR」とはそりが合わなかったが、ユダヤ系知識人の態度および彼らを取りまく風潮の変化で50年代末頃からユダヤ系の作品を載せるようになり（それぞれ独自の立場に立つ Salinger や Shaw の場合は別として、たとえば P. Roth の *The Defender of Faith* など）、「PR」の知的洗練の審判者にたいし世俗的洗練の審判者としての地位を確立する。ほかに「Vogue」、「Life」、「Playboy」といった一般有名雑誌へのユダヤ系の進出はいずれにせよ60年代以降のことで、1963年には「PR」の新聞版といわれる「New York Review of Books」も刊行される。なお、ユダヤ系出版物としては、「Commentary」のほか「Judaism」、「Midstream」などがあるが、異色なのはアメリカの大学を中心におこった若いユダヤ系知識人（ラディカルや学生も含む）の運動 Menorah Movement（1906年発足）を母胎にして創刊され、約半世紀にわたってユダヤ文化遺産の探究、振興をおこなった「Menorah Journal」（1915～62）で、E. Cohen は「Commentary」へ移るまえ本誌の編集長を務め、また Trilling も関係し、157版を重ねるあいだに若手作家・芸術家（約二百人）の寄稿を受け、ここから育った職業作家もあるといわれる。ついでながらイディッシュでは依然として「Der Forwartz」（「The Jewish Daily Forward」）や「Die Zukunft」などが出

ていた。

### 〔結び〕

戦後あきらかにされたホロコーストの言語に絶するショックとまといつくその忌まわしい記憶、世界のユダヤ人に誇りをとり戻させたイスラエルの建国とその生存を賭けた中東戦争にたいする危機感はいずれベクトルこそ違え、強烈な外的衝撃としてアメリカのユダヤ系にとってもその存在の根を大きく揺るがせるものだった。さらに、ナチス戦犯裁判やユダヤにかかわる事柄への関心の高まりで、一時 Jewish self-consciousness は強められ同化志向が鈍ったのは確かだが、作品をみる限りではホロコースト関係のものは経験上や言語面、時間的距離など作品化の諸条件により Malamud 等少数のしかも断片的、間接的なケースを除き60年代以降に多く、イスラエル建国をめぐっても、その栄光と使命をうたいあげるなど通俗ないし宣伝に流れたり、あるいは、いまやアメリカがシオンとなったユダヤ系にとってはせいぜい問題提起にとどまったりしているようだ。むしろ彼らにとって身近だったのは反ユダヤ主義・感情で、それもたんにその不当性を詰るキャンペーンやヒューマンイズムの視点からだけでなく、Bellow の *The Victim* のように設定がより一般的な人間の存在状況に拡大されて特殊から普遍への文学的効果を印象づける作品も出てきている。しかし、ともかく外的衝撃はあまりにも強く直截的で作品面でこそ乏しいが、ユダヤ系の identity の深層に悪夢、オブセッション、または血の疼きとなつてずっしりと負荷されたのである。

かつてのような大量の新参者が消滅し、ユダヤ系の相対的向上、繁栄がはかられるなかで、急速な都市化、工業社会化、画一化の進むアメリカの現実への積極的参加によって同化は否応なく浸透していき、次第に失われ捨てられる Jewish identity が外的衝撃と暗応しつつたえず彼らのなかのユダヤ性を内側から触発する——なにかのきっかけでふと浮かぶ遠い幼少期のユダヤの家庭生活や宗教行事にまつわる記憶、親との軋轢であらためて直面せざるを得ぬ伝統的価値、平生は忘れていても一族交流の場でいやでも感得させられるユダヤの血の意識、異教徒間結婚でつきあたる宗教的アイデンティティの危機、さらに日常生活のなかのなにげない動作、習慣にも根強く残る Judaism の痕跡……。こうしてこの期の作品には無意識にせよそれとないうしろめたさからにせよ、微妙な帰属意識（換言すれば同化と主体性の問題）をめぐって、おもに前稿 (No. 24) でみたように一段と進んだ同化の諸相を通してその複雑な反応を描いたものが多い。しかし彼らユダヤ系はたとえ移民の子であろうと、もはや大不況下

のロウアー・イースト・サイドにひしめく旧世代のようなアウトサイダーではなく、いまや現代アメリカ社会の一部、しかもその典型的タイプとしての都会生活の代弁者となったのだ（事実彼らは移民当初から都市居住者だった）。これを作品にあらわれる現象的な面からだけみても、映画産業界の成り上がり者 Sammy はまさに typical な American dream の実現者であり、都会の女子学生の夢とその挫折を通して戦後の性の解放や郊外生活を扱った Marjorie Morningstar は読書界にひろく迎えられた。Morton や Gold の小説に描かれる家族の絆の弛緩や親子の相克もめまぐるしい都会の現代家庭生活につきものであって、Roth の戯画化の対象となるユダヤ人の俗物ぶりや偏狭さ、狡猾さもすこし視点を移せば、そのまま現代人への諷刺に切りかわるだろうし、それはブラック・ヒューモリストたちによりさらに拡大、普遍化されていく。

生活・文化の都市化は小説のそれをも招来し、ユダヤ系文学はすでに20年代の“provincial writer”にかわって30年代以降都市中心の文学で現代アメリカ文学に大きな役割をはたしはじめていた。ただ30年代にあっては一部を除いてプロレタリア文学の領域にとどまり、反シオニズムやイデオロギーに捉われて結果的には自らを貧弱にしたが、40、50年代になるとユダヤ系作家、知識人の積極的活躍にみられるように現代小説の複雑な手法をマスターし、彼らを受け入れる条件も整っていくにつれ、文学的にもゲッターの枠を破る多様な展開を迎えることになる。いまそれを時代背景とからめてみれば、アメリカ社会はこの時期を通じかつてない繁栄のなかにありながら、東西両陣営の対立による緊張で50年代初めにマッカーシズムのような集団ヒステリーを招いたり、中産階級の拡大ないし大衆社会化の徹底で生活意識の画一化がみられ（いわゆる統合社会化）、諸組織の巨大化や技術革新のもたらす管理化などが個人の卑小化と抑圧をひきおこし、核の脅威が不安の心理をかきたてる。このような一種の疎外・閉塞的状况においてユダヤ系の抱く関心事が目されるに至り、とくに都会生活に先鋭化する人間性喪失、疎外、苦悩、社会批判あるいは不合理な時代における調和を追求する主題にユダヤ的経験からくるものの見方の妥当性を人々が発見することになったのだ。

ユダヤ系の側とすれば、元来その置かれた状況や体験から彼ら自身の存在に人間の条件の象徴をみてとり、あるいはアメリカ社会のなかの疎外状況を本能的に嗅ぎとって、彼らの血に根ざす潜在的疎外意識に共鳴させることになる。つまりユダヤ的経験がアメリカの舞台での天賦の一つとなったわけで、繁栄の時代の社会の皮相さ、まやかさ、空虚さ、不安定、狂気、滑稽さ、または人生の残忍性などはユダヤ的経験や気

質のはたらきからユダヤ系作家が取りあげるのに当然のテーマといえるのだ。すでに娯楽面を通じて大衆文化のユダヤ化はおこなわれていたが、ここに文学上も Fiedler 流にいて “Zion as Main Street”<sup>88)</sup> がユダヤ系作家のまえにひらけることとなったのである。Bellow にあっては 西欧近代の精神史を踏え、現代人の直面する実存状況のなかに humanity 志向の生き方を追求し、Malamud は小市民の世界を扱いながらユダヤ的倫理観を人生への洞察に拡大する。Mailer や Goodman は社会事象への過激な反応によって “順応という疎外” に立ち向かい、それと 対照的に Salinger は狼狽な現実のなかにおける一種の純粹さ、神秘性の追求をめざしているが、彼らはいずれもその潜在的ユダヤ人気質、性向はともかく、Jewishness を創作の主要な契機とはせず、それだけ普遍的命題へ向かっているといえよう。

以上のようなこの期のユダヤ系文学の展開を現代アメリカ文学の流れのなかに置いてみると、アメリカ文学そのものの変質とはいわないまでも、その拡大、多様化、活性化が60年代に向けていやでも目立ってくる。lost generation の代表的作家でそれぞれ戦後まもなくノーベル賞を受賞し、アメリカ文学を世界の一地方文学からその主流へ押しあげた Faulkner (1897~1962) と Hemingway (1899~1961) は、いずれも労作というべき *The Fable* (1954), *The Old Man and the Sea* (1952) などでもなお晩年の創作活動をみせていたものの、結局彼らの作家としての本領は戦前のものにあって、60年代早々に二人とも文字通りその生命を終える。その他の既成作家 Dos Passos (1896~1970), Steinbeck (1902~68), Wright (1908~60) 等にしても事情はほぼおなじで (ビートの元祖ともいわれる H. Miller—1881~1980—は存命期間もながくやや特異な位置を占めるが)、それらに代るよう 戦後の実存状況、不条理な世界、あるいはテクノロジー文明の肥大化のなかで、人種の抑圧を負いながら Wright の据えた礎石に立つ黒人作家 (R. Ellison, J. Baldwin 等) や、歴史的、地域的特殊性によって Southern Renaissance に連なる南部作家 (K. A. Porter, R. P. Warren, E. Welty, C. McCullers, T. Capote, W. Styron, F. O'Connor 等) とならんでその民族的特性と都会生活のあゝを身にしみ込ませたユダヤ系作家の抬頭がみられ、さらに50年代後半から人間性回復をめざし実生活にわたって求道的な The Beat Generation の運動が加わる。

このなかで40年代にはまだ雑誌社などにユダヤ系作家の作品を出版したがらぬ風潮があったものの、戦後相ついで出た戦争小説の分野で Mailer, Shaw などは早くも頭角をあらわし、とくに前者は自ら唱える “少数派の内面的生活の精神的複雑さ激しさ” そのままに その後も旺盛な反体制的作家活動へ踏み込んでゆく。当初「PR」や

『Commentary』が Bellow や Malamud 等の若いユダヤ系作家に作品発表の場をあたえているうち、50年代に入るにつれ各種の受賞を通して彼らの全国的読書界相手の本格的活躍がはじまり、その末期には第3世代の Roth 等のはなばなしい登場まで迎えることになる。この間やや通俗的ながら *Gentleman's Agreement* や *Marjorie Morningstar* のようなベストセラー作品もあらわれ、戦後若者の人気を博した Salinger になるとユダヤ性はともかく、50年代にほぼその作品活動のすべてを出しつくしたという感じで今日に至っている。逆に Singer は翻訳を通してではあるが、旧東欧ユダヤ人社会の信仰と怪異の濃密な世界を扱い現代の不条理のなかの情念志向に通ずるものに訴え、爾後とくに60年代末からの反機能主義、非合理、超自然の世界の復活のなかでブームに近い注目を浴びる。おなじく60年代へ向け、これは反体制運動のなかで若者たちの教祖的存在となっていく Goodman, また Roth は自虐的視点に立ちつつブラック・ヒューモリストの先駆として自らもその傾向に色濃く染っていく。

これらユダヤ系作家たちは彼らの作品を通して、その対応こそたとえユダヤ性自体をめぐるまでもこれまでみたように多種多様、複雑微妙だが、この時期偏狭主義から解放される過程でアメリカ文学の主流の通念的見方を修正、拡大し豊かにするのに貢献したといえるだろう。rural literature にたいする urban literature を生み出したと指摘する向きもあるが、少くともこれまでのアメリカ文学の regional な伝統にユダヤ的という（といっても普遍性に富む都会的要素を含んだ）一つの特殊性を添加したのであり、shlemiel 的人間像からくる antihero の創出や、イディッシュ表現の精神を文学的創造に生かすことでいままでの Protestantism のアメリカとは一味違った風味をもたらしたわけである。内発の無意識的帰属感の揺れにせよ、ホロコーストの悪夢に触発されたユダヤ人的感性の漂わず疎外感や被害者意識にせよ、彼らはこの時代の状況に共鳴し、ユダヤ的特性をなんらかの形で保持したまま、内容の複層化、普遍化を高め、60年代に入ると ethnic factor の高揚に伴いアメリカ的生活への同化、適応の再点検——アイデンティティの再確認がおこるが、Bellow など主要なユダヤ系作家は同時にアメリカの代表的現代作家として、名実ともに Faulkner たちのあとを担うようになる。

〔(11)の項については一部別の形で「文学空間」vol. II-No. 5 (S. 62. 7. 10 発行)に発表したものによる〕

〔注〕

- 1) A. Guttman, *The Jewish Writer in America* (New York: Oxford Univ. Press, Inc., 1971) p. 149.



- 2) C. Angoff, *The Naked and the Dead*, Intro. [C. Angoff & M. Levin, ed., *The Rise of American Jewish Literature* (New York: Simon & Schuster, 1970) 所収 p. 364]
- 3) A. Guttman, *The Jewish Writer in America*, p. 154.
- 4) Ibid., p. 172.
- 5) N. メイラー, 山西英一訳『ぼく自身のための広告』下巻(新潮社, 1962) p. 117.
- 6) I. Hassan, *Contemporary American Literature: 1945-1972 An Introduction* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., Inc., 1973) p. 71.
- 7) D. Schwartz, *Under Forty* [T. L. Gross, ed., *The Literature of American Jews* (New York: The Free Press, 1973) 所収 p. 363]
- 8) I. Rosenfeld, *Under Forty* (*The Literature of American Jews* 所収 p. 380)
- 9) A. Kazin, *Under Forty* (*The Literature of American Jews* 所収 p. 392)
- 10) L. Trilling, *Under Forty* (*The Literature of American Jews* 所収 p. 360)
- 11) N. Podhoretz, *Jewishness and The Younger Intellectuals*, Introduction (*The Literature of American Jews* 所収 p. 474)
- 12) A. Kazin, *New York Jew* (New York: Alfred A. Knopf, 1978) p. 141.
- 13) A. Kazin, *The Jew as Modern American Writer* (*The Literature of American Jews* 所収 p. 400)
- 14) H. Gold, *Jewishness and the Younger Intellectuals* (*The Literature of American Jews* 所収 p. 481)
- 15) T. L. Gross, *The Literature of American Jews: Part III After the War-A Creative Awakening*, Intro., p. 172, p. 177.
- 16) 例えば, 自己の体験をもとにユダヤの民族的精神のアメリカにおける新たな融合と定着を説く N. Podhoretz の *Jewish Culture and the Intellectuals* (「Commentary」 May, 1955), 30年代以降アメリカ小説の主要商品となったユダヤ系文学の特性を各作家の考察も交えて論述した L. A. Fiedler の *The Breakthrough* (「Midstream」 IV-Winter, 1958) や *The Jew in the American Novel* (1959), 文学外では, 一見ユダヤ離れしているユダヤ系アメリカ人の性向にひそむ宗教的意味や Judaism 復活の兆しのなかで Jewish life の実例を示すといわれるユダヤ共同体の役割を探った N. Glazer の *American Judaism* (1957), 第2世代に属する自らの体験に則しながら Jewish life の縮小で希薄になりつつあるアメリカのユダヤ系の identity の推移をとりあげた D. Bell の *Reflections on Jewish Identity* (「Commentary」 1961) などがある。
- 17) 非ユダヤ系では, D. McDonald, F. W. Dupee, W. Barrett, R. Chase, M. McCarthy, J. Baldwin など。
- 18) 移民後主要な左翼のジャーナリスト評論家となり, 社会・歴史的観点による文芸批評も手がけた。Hawthorne から Kafka まで扱った代表的評論集 *Image and Idea* (1949) のほか多くの編著書がある。
- 19) Dewey の影響の下で科学と合理性 および 啓蒙主義の遺産を強調し, 社会・政治問題を扱う。著書に *From Hegel to Marx* (1936), *Education for Modern Man* (1946) 等。
- 20) ヨーロッパで大戦中ユダヤ人の救出にあたったのち渡米 (1941), 著書に *Origins of Totalitarianism* (1951), *The Human Condition* (1958), *Eichmann in Jerusalem* (1963) 等。

- 21) 批評, 研究には深層心理と人類学の知見によりアメリカ文学の神話と原型を探った *Love and Death in the American Novel* (1960) のほか *Waiting for the End* (1964) などユダヤ系を含め現代文学を扱ったものが多い。小説では *The Second Stone: A Love Story* (1963) 他二編, 短篇集が *The Last Jew in America* 他二つある。
- 22) 早くからトロツキスト系の運動にたずさわり, 「New Leader」の編集長を務めたり各大学で教える。著書に *Marxian Socialism in America* (1952), *The New American Right* (1955), *The End of Ideology* (1960) など。
- 23) 「Commentary」誌のスタッフも務める, D. Riesman 等との共同研究 *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character* (1950), D. Moynihan との共著 *Beyond the Melting Pot* (1963) 等がある。
- 24) A. Kazin, *The Jew as Modern American Writer (The Literature of American Jews* 所収 p. 399)
- 25) Ibid., p. 400.
- 26) I. Howe, *World of Our Fathers* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1976) p. 602.
- 27) Ibid., p. 606.
- 28) N. Podhoretz, *Making It* (New York: Random House, 1967) p. 116.
- 29) I. Howe, *World of Our Fathers*, p. 607.
- 30) L. A. Fiedler, *The Breakthrough: The American Jewish Novelist and the Fictional Image of the Jew* [J. J. Waldmeir, ed., *Recent American Fiction* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1963) 所収 p. 105]
- 31) W. Phillips, On 「Partisan Review」 [E. Anderson & M. Kinzie ed., *The Little Magazine in America: A Modern Documentary History* (New York: The Pushcart Press, 1978) 所収 pp. 130-141]。なお, このほか J. B. ギルバートの『作家と党派』(大津栄一郎訳, 研究社, 1974) にもよる。
- 32) L. A. Fiedler, *The Breakthrough* (*Recent American Fiction* 所収 p. 106)
- 33) A. Kazin, *The Jew as Modern American Writer (The Literature of American Jews* 所収 p. 399)
- 34) Ibid., p. 400.
- 35) N. ポドーレツ, 『ユダヤ文化と知識人』[中西勝之『現代ユダヤ系アメリカ文学』(原書房, 1981) 所収 p. 163]
- 36) *Waiting for the End* の第5章のタイトル。

(い나다 たけひこ 本学教授・英語)